

「役立たず」と嫌われた

悪役令嬢ですが、

最強パパに愛されながら

自由に生きてます！

Characters

登場人物紹介

レオノーラ・スペンサー

ディートリヒの姉。
ルクレツィアに
冷たく厳しく
接するが……

親子

親子

イクス・スペンサー

カインの弟。
グリムの上官。
快活で細かいことは
気にしない。

カイン・スペンサー

ディートリヒの甥。
無口で不愛想だが、
優秀な魔術師。
従妹のルクレツィアの
前にたびたび現れ、
贈り物をする。

グリム・ベガ

ダークエルフの軍人。
ルクレツィアの
生い立ちに共感し、
気遣うようになる。

北の領地 イスラーク

エリーチカ・ヴァイスローズ

ヴァイスローズ
公爵家の一人娘。
貴族令嬢たちと共に、
ルクレツィアに
嫌がらせをする。

ユーリ・ティア・マルドゥセル

マルドゥセル
魔導帝国の王太子。
ルクレツィアの
婚約者。

ディートリヒ・ヴァル・クラウベルク

マルドゥセル魔導帝国の公爵で、
国内随一の氷魔法の使い手。
娘のルクレツィアと
離れて暮らしているが、
それには事情があるようで……

ルクレツィア・クラウベルク

ディートリヒの一人娘。
美貌だが魔力なしのため、
周囲から蔑まれている。
一見わがままに見えるが、
じつは好奇心旺盛で
心優しい性格。

ヴァレン・イルデヴァート

竜族の少年。
生意気な性格で
周囲を振り回す。
ルクレツィアを友人として
大切に思っている。

マルドゥセル魔導帝国

第一章 偉大なる魔術師と見捨てられた少女

ガチャン！ と大きな音がして、周りの者は何事かと注目した。

「もう一度、言ってみなさいよ！」

息を荒くして顔を真っ赤にした幼い少女が席から立ち上がり、向かいに座る一人の伯爵令嬢を睨みつける。

周りの者は、またか……とうんざりした気持ちになった。

ルクレツィア・クラウベルク公爵令嬢。紫に煌めく夜空のような黒髪と、神秘的に輝く紫色の瞳。幼いながらも申し分のない美貌を持つ彼女なのだが、その性格はまだ十歳とは思えないほどに苛烈だった。

美貌よりもその苛烈さが悪目立ちしており、多くの者は彼女を煙たがっていた。

「私が、お父様に捨てられたって……そう言いたいのか!？」

ルクレツィアは目にいっぱい涙を溜めて、怒りのこもった表情で向かいに座る令嬢に叫んだ。

今日は皇子が開催するガーデンパーティーだった。帝都に住む高貴な少年少女を集めて、楽しい時間となるはずだったのに……傍観していた皇后が、やれやれといった様子で小さく息を吐いた。

「ち、違いますっ……ただ、ルクレツィア様のお父様は、なぜいらっしやらないのかと疑問に思っただけなのです……」

ルクレツィアの勢いに圧倒されて泣きそうになっている伯爵令嬢は、か細く震える声で答えた。本日のパティーでは、ルクレツィアと同年代の貴族の子女が集められている。

しかし、まだ幼い子供達なので、保護者も同伴しているのだ。ルクレツィア以外は。

ルクレツィアの父、デイトトリヒ・ヴィル・クラウベルク公爵はこの国で最も優れた魔術師であり、魔塔を管理する『北の氷王』と呼ばれる人物だった。

このマルドゥセル魔導帝国は魔術師の国だ。皇族はもちろん、高位貴族は当然のように皆が魔術師であり、魔法の使えない者は低位貴族や平民に稀にいる程度。

魔法が使えない者はこの国では『魔力なし』と呼ばれ、差別され見下される風潮があった。

そんな国で、偉大なる魔術師という称号の『ヴィル』を継承したデイトトリヒは、国民達の憧れであり、そして英雄だった。

震える伯爵令嬢を責め立てるルクレツィアを見る周りの目は、どんどん白くなっていく。ヒソヒソとルクレツィアの行いを非難する声も上がってきた。

ルクレツィアは自分が非難の的になっている事に気付き、怖気付いて口を閉じる。

(なによ、なによ……皆、私が魔力なしだからって馬鹿にしているんだわ！)

素晴らしい父を持つルクレツィアは、魔法の使えない魔力なしだった。

帝都では有名な話だ。なぜ、幼いルクレツィアだけを帝都に残し、父親のデイトトリヒは北の領

地に住んでいるのか。なぜ、何年もデイトトリヒは帝都に足を運ばないのか。

その答えは、ルクレツィア・クラウベルクが魔力なしであるがために父親に見捨てられているから。

「また魔力なしが騒いでるよ」

「いくら可愛くたって、魔力なしであの性格は……俺なら無理だなあ」

「偉大な魔術師の娘だからって、魔力なしと婚約させられている皇太子殿下がお可哀想……」

少年少女が嘲笑し、その親達は顔を顰めている。魔力なし、ノーマン、ノーマン……ルクレツィアの耳に差別に満ちた言葉が木霊する。その蔑む視線に晒された彼女は、恐怖から足元がグラグラと揺れる感覚に襲われた。

そんな中で、一人の少女が動いた。

「大丈夫？」

ルクレツィアに対してではない。ついに泣きだした伯爵令嬢に優しく声をかける少女は……

「まあ、エリーチカ公女様だわ。すかさず泣いている子に声をかけて、手を差し伸べているよ。なんて優しく立派な子なのだろう」

「帝国の、同じ公爵令嬢でこうも違うとは……」

その少女は、帝国の公爵家に生まれた公女エリーチカ・ヴァイスローズだった。

絹糸のように独特な光沢と深みのある白い髪、そして目の覚めるような鮮やかな緑色の瞳。まるで白薔薇のような高貴さと可憐さを兼ね備えたご令嬢だ。その地位も相まって、同年代の令嬢達から絶大な支持を得ている。

魔法の才、美貌、思慮深く優しい性格……同じ公爵令嬢でありながらルクレツィアと正反対の彼女とは、よく比較されてきた。正義はエリーチカ、そして悪はルクレツィア。

伯爵令嬢を心配そうに見つめていた緑色の目が、ゆっくりとルクレツィアへ向けられる。

「ルクレツィア公女様」

エリーチカは悲しそうな表情で、ルクレツィアに訴えるように語りかけた。

「どうして私のお友達を虐めるの？」

「い、虐める……？」

エリーチカの言葉にぎよつとして、ルクレツィアは思わず彼女の言葉を復唱していた。

「そうよ。こんなに泣くまで彼女を責めるなんて」

エリーチカは再び伯爵令嬢に目を向けると、慰めるように彼女の頭を撫でた。

『虐め』という言葉聞き、同伴していた親達はますます表情を険しくさせていた。

「クラウベルク公女は無才能な魔力なしというだけではなく、まだあの歳にもかかわらず人を虐める卑劣な性格なのか」

「これが未来の皇太子妃？ 冗談だろうか？」

「友人を気遣うヴァイスローズ公女の方が、よっぽど皇太子妃に相応しいように思うけれど……」

子供達だけでなく、親達からの非難も相まって、ルクレツィアは慌てて弁解しようと叫んだ。

「私は虐めてなんかいない！」

過激だ卑劣だと言われようと、ルクレツィアは自分を守るために必死に戦うしかない。だって、

彼女のために、声を上げてくれる人は誰もいないのだから。

「ただ、彼女がお父様の事で意地悪を言うから、少し言い返しただけ……」

ルクレツィアがそう言いながら周りを見ると、その場の全員が冷たい目でルクレツィアを見ていた。その瞬間、ルクレツィアは恐怖でひゅつと喉が絞まり、口を噤んでしまう。

（誰も信じたくない……）

自分を嘲る、嫌悪する目がルクレツィアの四方を取り囲み責め立ててくる。逃げ場のない恐怖と苦しみが彼女の心を支配していった。

ルクレツィアの味方なんて、一人もいない。彼女の日常はいつもこうだ。

「違うのに……私は虐めていないのに、先に嫌な事を言ったのは彼女なのに……どうして誰も信じてくれないの!？」

ルクレツィアの目からはついに涙がこぼれ落ち、頭を抱えて蹲るが誰も助けてはくれない。ルクレツィアもエリーチカと同じ公女なのに、どうしてこうも扱いに差があるのか？

（私だって、お父様の娘だ！ クラウベルク公爵家だ！）

周りの嘲りに耐えるように固く目を瞑り、心の中で必死に言い聞かせた。

「——さっさと帰れよ、魔力なし」

どこからか、そんな声はつきりと聞こえて……ルクレツィアは目を開く。

（……でも、私はノーマンなんだ……）

ルクレツィアが少し顔を上げると、すぐ目の前にいたエリーチカと伯爵令嬢の二人と目が合った。

彼女達は、ルクレツィアの惨めな姿を見つめて、薄っすらと笑っていた。

消えなくなるくらいに、心が痛い。好きで『魔力なし』に生まれてきたわけじゃないのに……悔しさが込み上がる。

ルクレツィアは荒々しく手の甲で涙を拭くと、もう屋敷に帰ろうと勢いよく立ち上がった。

「……あ」

すると、すぐ目の前に綺麗な少年が立っていた。ちょうどルクレツィアに手を伸ばし、声を掛けようとしていたのか、行き先の失った手を気まずそうに引っ込めている。

その少年はルクレツィアの婚約者でもある、この国の皇太子ユーリ・ティア・マルドゥセルだった。月のように焔めく白金髪が美しい、天使のような少年だ。

「……所用を思い出しましたので、私はここで失礼します」

ルクレツィアは俯いたまま、パーティーホストのユーリに挨拶をすると、足早に出口へと向かう。ルクレツィア嬢！」

すると後ろからユーリが腕を掴んできた。

「……そこまで送るよ」

ユーリは気遣うような笑みを浮かべてから、ルクレツィアをエスコートするための手を差し伸べてくる。ルクレツィアは少し考えてから「お願いします」と、ユーリの手を掴んだのだった。

「ルクレツィア嬢、これからはもう少し……落ち着いて話す努力をしてみよう？」

馬車までの道のりで、ユーリがルクレツィアに言った。

「……私だけが悪いのですか？」

ルクレツィアは再び目にジワリと涙を浮かべながら、震える声でユーリに尋ねる。

「あの令嬢は、私を貶めようとわざわざお父様のことを言ってきたのですよ？」

ルクレツィアははつきりと覚えている。あの伯爵令嬢ははじめ、悪意ある笑みを浮かべて自分にわざと父親の不在を指摘してきたのだ。

そして、最後に見たエリーチカと伯爵令嬢の笑み。あの笑みは確かに、ルクレツィアを陥れたと満足した笑みだった。

「殿下も私が魔力なしだからと……だから私が我慢するべきだとおっしゃっているのですか!？」

「そうじゃないよ、ルクレツィア嬢」

興奮するルクレツィアにユーリは疲れたように息を吐く。

「ただ僕は……もう少し貴女が周りの者達と馴染んで欲しいと思っただけなんだ」

ユーリは心優しい少年だ。この国の皇子として教養があり、美しさも兼ね備えている。きっと将来、国民達を正しく導いてくれる皇帝となるのだろう。けれど……

(ユーリ殿下は、原因はいつも私にあると考えている)

ルクレツィアにとって、聖人だろうがなんだろうがそんな事はどうでもいい。彼に魔力なしだと嘲られた事はないが、庇ってもらった事もない。

ユーリが手を差し伸べてくれるのは、いつだってルクレツィアが傷付いた後だ。自分が笑われて

いる間、ユーリはただの傍観者となる。

優しいけれど、優しくない。それがルクレツィアにとってのユーリだった。

「この辺りで結構です」

「……うん、そっか」

ルクレツィアが手を離すと、ユーリは少し安堵した様子だった。

「屋敷まで送ってあげられなくてごめんね。僕がパーティーホストだから、もう戻らないと……」

「ここまでエスコートしていただき、ありがとうございました」

ルクレツィアは丁寧にお辞儀をしてユーリと別れる。そして、暫くして到着した馬車に乗り込み、自分の屋敷への帰路に就いた。

(今頃、皆はパーティーで楽しく過ごしているのかな)

ルクレツィアは、泣きべそな自分に苛立ちながら荒々しく涙を拭ったのだった。



ルクレツィアの姿を見た屋敷の門番は、挨拶もなく静かに門を開いた。ルクレツィアはそのまま敷地内へと入り、そして屋敷の扉を開く。玄関ホールは使用人達が動き回るいつもの光景だった。

皆、ルクレツィアにチラリと視線を送るが話しかける者はいない。使用人にさえ馬鹿にされ、見下されているのだ。それがルクレツィアの当たり前だった。

最低限の衣食住は提供してくれるから、ルクレツィアも何も言わずに彼らの無礼を傍観している。ルクレツィアは二階にある自室へ真っ直ぐ向かい、到着すると勢いよく扉をしめて、大きく深呼吸をした。

自室の中だけが、ルクレツィアが唯一ちゃんと呼吸できる場所だった。本当は部屋に引きこもっていたけれど……ただでさえ役立たずなのに、そんな事をしてクラウベルクの名に泥を塗ったら、本当に捨てられるかもしれない。

ルクレツィアはトボトボと歩き大きなベッドの脇に立つと、ぽすつとダイブするように体をベッドへ預けた。その時――。

――ガサ、と窓の外で木の葉が揺れる音がした。

「……?」

ルクレツィアは疲れた顔をベッドから上げて、音の正体を探してバルコニーへと出る。下を覗き込んでみたが、誰もいなかった。

「気のせい……?」

と、ルクレツィアが呟くと……ポタ、と上から何やら赤い液体が滴り、ちょうどルクレツィアの鼻先に落ちてきて、声にならない叫びをあげる。

ルクレツィアが恐る恐る上を見ると、そこには手負いの、小さな黒い竜が木の枝に引っかかっているではないか。

「え?」

はじめて竜を目撃して、ルクレツィアは思わず小さな叫び声を上げた。

帝国には、人間以外の種族も沢山住んでいる。エルフはたまに見かけるけれど、竜はとても珍しい。ルクレツィアの住むこの国は人間が統べる魔術師の国だが、世界には獣人の国や、魚人達の地底湖の国もあるらしい。竜の国は、人間では辿り着けない瘴気しやうきに包まれた未開の地にあるという。

竜と貴重な出会いを果たしたルクレツィアは驚きのあまり固まってしまったが、すぐに竜が怪我している事を思い出す。赤子ほどの大きさの竜を助けてやろうと手を伸ばした。

バルコニーの手すりの上に足をかけ、恐ろしいので下を見ないようにしながら黒竜に手を伸ばす。すると竜の目がパチリと開き、真っ黒な瞳がルクレツィアの姿を映した。

「グル……、と小さな唸り声をあげる竜。」

「手当てしてあげるだけだから……降りておいでよ」

ルクレツィアが両手を伸ばして声を掛けるが、竜は上体を起こすと彼女の手が届かないところに身を寄せた。

暫く待つてみたが、竜は降りてこなかった。次第に腕の痺れを感じ、一度部屋に戻ろうとルクレツィアが視線を下に向けた時、ぐらりとバランスを崩し、ルクレツィアの体は手すりの向こう側へと傾いた。

ここは二階だ。まだ小さなルクレツィアが下に落ちたら、怪我だけでは済まないだろう。ルクレツィアの頭からサアツと血の気が引き、どこかへ掴まろうと腕をバタつかせるが届かず……

いよいよ体の半分が宙に浮いた時、誰かがルクレツィアの腕を掴んで、これ以上傾くのを阻止し

てくれた。

「あぶないぞー！」

ルクレツィアがガクガクと震えながら、掴まれた腕の先に目をやると、そこには見知らぬ少年がいた。焦った表情で木の枝の上から身を乗り出して、ルクレツィアの腕を掴んでいる。

「た、たすけ……」

ルクレツィアが怯えた声を上げると、少年は仕方なさそうな様子で彼女の腕を持ち上げるように引き寄せて、あつという間にルクレツィアを抱きかかえてしまった。そして身軽に木の枝から降りると、バルコニーでルクレツィアを下ろす。

片腕でルクレツィアを軽々と持ち上げるなんて凄い力だ。

ルクレツィアは驚きのあまり、落ちそうになっていた恐怖はすっかりどこかへ飛んでいき、目の前に立つ少年に目を向ける。

黒髪に黒い瞳の少年は至る所に怪我をしているらしく、血が滴っている。

「もしかして、君は……」

ルクレツィアは確信していた。

「さっきの黒い竜？」

すると、少年の黒い瞳がルクレツィアの姿を映す。

「ヴィレン、だ」

「はい？」

「俺の名前」

黒竜……いや、ヴェレンは無愛想な表情でルクレツィアに名乗った。艶やかな黒髪に黒い瞳、左目の下に黒子が二つ並んでいるのが特徴的だ。彼は顔立ちの整ったとても綺麗な少年だった。

「あ……私はルクレツィアよ」

ルクレツィアは戸惑いながら自身も名乗ると、ヴェレンは「そうか」と短く返す。

「手当てしてくれるんだろ？ 中に入るぞ」

なぜか急に手当てを受ける気になったらしく、ヴェレンは偉そうな態度で言うと、ルクレツィアの部屋の中へ入って行ってしまった。ポカんと呆けるルクレツィアだったが、ハッと我に返ると慌ててヴェレンの後を追う部屋に戻った。

バルコニーから部屋に入ると、ヴェレンは物珍しそうな顔で部屋の中を見渡していた。

（人間の部屋が珍しいからだろうけど……部屋の中をそうまじまじと見られると恥ずかしいな）

ルクレツィアは恥ずかしい気持ちからコホンとひとつ咳払いしてヴェレンに声を掛けた。

「その椅子に座って」

ルクレツィアは椅子を指差しながら指示して、自室の備え付けのシャワールームへ桶とタオルを取りに向かう。

そんな彼女の後ろ姿を静かに見つめながらヴェレンは眉を顰めた。

（傷が痛むから、少し休んでいただけなのに……）

人族と関わるつもりはなかったヴェレンだったが、彼女がバルコニーから落ちそうになっている

光景を見たら、反射的に手を伸ばして助けてしまった。

「……」

彼の頭の中に先ほど自分を手当てしようと、懸命に手を伸ばすルクレツィアの姿が思い返される。（……結構可愛かったし、手当てくらい……別にされてやってもいいけど……）

そんなことを無意識に考えた自分にハッと気づき、慌てて考えを否定するように、勢いよく頭を横に振った。

ルクレツィアは水を張った桶を抱えて部屋に戻ると、引き出しの中から消毒液や包帯を取り出した。小さな傷を処置してくれる人はこの屋敷に居ないので、彼女は今まで自分で怪我の処置をしてきた。だから手当てはお手のもの。

水で濡らしたタオルでヴェレンの傷を刺激しないように優しく血を拭いた。消毒液を湿らせたタオルを傷口に当てると、沁みるのかヴェレンが眉根を寄せていた。

「手当てといっても簡単なことしかできないけど……」

血が出ている割には大した傷ではなかったみたいでルクレツィアは安堵する。最後に清潔な包帯で傷を塞いで、ルクレツィアが満足そうに「よし」と呟いた。ヴェレンはまたもや珍しそうな顔で包帯を眺めていた。

「他にもう傷はない？」

ルクレツィアが尋ねると「ない」と、ヴェレンは短く答える。よかったと思う反面、少しだけ寂しい気持ちになる。傷の手当てが終われば、ヴェレンはどこかへ行ってしまうだろうか。

自分を魔力なしだと蔑む目を向けなくてくれるヴィレンに、ルクレッツィアは救われていた。それに、怪我を手当てさせてくれて……こんな自分にも価値があるように思えて嬉しかったのだ。ヴィレンは立ち上がり、バルコニーのドアに手を掛ける。

「あ……さようなら」

ルクレッツィアは少しだけ悲しく思いながらも、笑顔を作ってヴィレンの後ろ姿に手を振ると、彼が振り返った。

「……やっぱり、疲れたし少し休んでから行く」

気が変わったのか、そう言ってヴィレンはルクレッツィアのベッドの上に遠慮なく大の字になって寝転ぶ。私のベッド……と、思いながらも、ルクレッツィアは嬉しく思った。

「お前も寝るなら隣で寝れば？」

立ったままのルクレッツィアにヴィレンが言うと、ルクレッツィアはポカンと呆気に取られた顔をした後、表情を引き締めてベッドの上にあがる。

「私のベッドなんですけど」

「広いんだし、別にいいだろ」

悪びれもないヴィレンの態度にルクレッツィアは呆れてため息をつき、そして彼の隣に寝転んだ。なんとなく、二人は天井を見上げながらお互いの身の上話をポツリポツリと語って聞かせた。

ヴィレンは竜が続べる国、魔王国からやって来たらしく、父親と大喧嘩の末、家出してきたらしい。怪我は父親との喧嘩でできたものらしい。どれだけ激しい喧嘩だったんだ……と、ルクレッツィ

アは竜の凄さを実感した。

ルクレッツィアも少しだけ自分の事を話した。

「ふうん、魔力なしね」

ヴィレンは興味なさそうに呟く。

「人間って、差別が好きだよなあ」

「そうかな……？」

ルクレッツィアは相槌を打ちながらも、胸が痛み、息苦しくなってきた。先ほどまで参加していた皇室のお茶会での出来事を思い出したからだ。

皆がルクレッツィアを嘲笑い『魔力なし』だと貶す。彼らが向ける目は、嫌悪や侮蔑。そして……エリーチカと伯爵令嬢が見せた嘲笑。あれは、ただルクレッツィアを嫌うだけではなく、彼女が惨めに傷つく姿を見て楽しんでる笑みだった。

「……そうなのかも」

そう続けて、ルクレッツィアは苦しくて悲しい気持ちになる。魔力なしがいかに酷い蔑称なのかを改めて思い知った。その言葉はナイフよりも鋭く、ルクレッツィアの心に深く突き刺さっているのだ。踏みにじられる誰かがいれば、反対に踏みにじる事を楽しむ誰かもいるのだ。これまで、当たり前前に受け入れていた。魔力なしで生まれた自分が悪いからと、そう自身に言い聞かせて生きてきた。（私、どうして今まで気付かなかったのかなあ……）

自分の受けてきた仕打ちが、不公平で理不尽だったって事に。



暫く沈黙が続くルクレツィアが何となくそわそわとしていたら、ヴィレンが突然上体を起こした。
「お前、この国が嫌なら俺と一緒に来る？」

そして、ルクレツィアを見下ろしながら言う。驚いて、ルクレツィアも上体を起こした。

「もう少し他の国を見て回ったら、自分の国に帰るからさ。ルクレツィアも魔王国に来れば？」

魔力^ノマジダ^マだろうがなんだろうが、魔王国では差別しないと、ヴィレンは続けた。

突拍子のない提案にルクレツィアは何も答えられないでいた。

「まあ……すぐには決められないか。国を捨てるようなもんだし」

ヴィレンの言葉にルクレツィアは顔を上げる。

「私、行かないわ！」

一瞬でも自分が国を捨ててしまおうかと考えていた事を、恐ろしく思った。自分は誇り高い父の娘だ、クラウベルクの娘だ。それなのに、国を捨てようだなんて……

ルクレツィアが俯くと、涙が太ももの上に落ちる。

「あ……」

ヴィレンが困ったように声をあげた。

「悪かったよ……」

「……ヴィレンのせいじゃないの」

泣き虫で弱い自分が嫌いだ。ルクレツィアは涙を拭ってヴィレンを見る。

「またどこかで会える？」

ルクレツィアが尋ねると、ヴィレンは「うん……」と、唸りながら難しい顔で考えている。「手、出して」

ヴィレンが手のひらを差し出してきたので、ルクレツィアは首を傾げながらも、その手に自分の手を重ねる。すると、二人の手のひらの間から光が漏れ出した。

ルクレツィアは驚きながら目の前のヴィレンを見て、さらに目を丸くする。

「ヴィレン！ 目が……！」

ヴィレンの黒曜石のように黒かった綺麗な瞳が、まるでルクレツィアと同じ紫色の瞳に変色していたのだ。

「ルクレツィアの魔力を取り込んだからな」

お前と同じ色だ、と、ずいと顔を近付けてきて笑うヴィレン。ルクレツィアは耳を疑った。

「魔力!? 私にも魔力があるの!?!」

魔法が使えない魔力なしなのに……と、ルクレツィアの声は思わず大きくなる。

「ああ、あるぞ。お前の場合は……魔力がないというより、魔法が使えないんだと思う」

その原因までは俺には分からないけれど、と締め括る。

ルクレツィアは信じられない気持ちで手のひらを見つめた。ないと思っていた魔力がある。もしかすると……自分も父と同じように魔術師になれるのかもしれないと、微かな希望を持つてしまう。

「取り込んだお前の魔力を辿って、俺から会いに行つてやるよ。気が向いたらな」

ヴィレンが照れながらそう言うので、ルクレツィアは嬉しくて笑った。

「お前、ちゃんと笑えるじゃん」

「……え?」

ヴィレンの言葉に、ルクレツィア自身も自分が久しぶりに笑えた事に気付いて驚いた。目の前に立つヴィレンに目を向ければ、彼も明るい表情でニカッと笑っていた。

同時に、先ほどのエリーチカ達の嘲笑が頭に浮かんで、ルクレツィアの目の奥がツンと熱くなる。幼い頃から顔を合わせてきた彼女達とは違い、はじめて出会ったヴィレンはルクレツィアに温かな笑顔を向けてくれたのだ。その笑顔は、これまでルクレツィアがどれほど求めていたものだろうか。「じゃあな。俺、そろそろ行くわ」

ヴィレンが別れを告げる。その瞬間ルクレツィアは現実引き戻された。

そうだ、ヴィレンとのこの出会いは、二人の人生がほんの少し交わった一瞬の出会い。魔力を辿つてまた会いに来てくれると彼は言ったけれど、それがいつになるのかルクレツィアには分からない。

「うん。またね……」

ルクレツィアは元気のない声で返した。またねと声を掛けて……バルコニーの方へと向かうヴィレンを見つめながら、ルクレツィアは思った。

（このままヴィレンが行つてしまってもいいの……?）

『一瞬の出会い』のまま、本当にいいの？

「あ……ヴィレン！」

彼が竜の翼を生やし飛び立つ瞬間、ルクレツィアは咄嗟に引き留めていた。ヴィレンが振り返る。

「私と、お友達になってくれない？」

ルクレツィアは勇気を振り絞り、緊張に震える声でヴィレンに言った。互いが何者でもないままヴィレンと別れるのは嫌だった。次に会う時は、ルクレツィアはヴィレンの友達として会いたいと思った。一瞬の出会いではなく、一生の出会いにしたいと……

ヴィレンの返答を待つ間、ルクレツィアの心臓はドキドキと高鳴っていた。ヴィレンは少し目を丸くしてこちらを見た後、すぐに笑みを浮かべた。

「……お前はさ、自分の気持ちを父親にちゃんと言ってみた方がいいと思う」

「え？」

急に違う話題を振られてルクレツィアは戸惑う。

「ここに一人で居ることが辛いなら、連れて行って欲って言えば？」

「……そんなわがままは言えないよ」

ただでさえ自分は役立たずなのに……そんなわがままを言っただけ嫌われたくない。ルクレツィアも認めたくないが分かっているのだ、偉大な父デイトリヒはきつと自分に興味がない。

「わがままくらい言うだろ、親子なら」

しかしヴィレンはルクレツィアの悩みを笑い飛ばし、ごく当然のように言っただけだ。

「俺なんてよく親父と喧嘩してるぞ」

そして得意げにそう言うものだから、ルクレツィアも思わず小さく笑った。

「父親にわがままを言え。そしたらお前と友達になって……お前をルーシーと呼んでやる！」

『ルーシー』、ルクレツィアの愛称だ。この世界に誰一人として、自分を愛称で呼んでくれる人なんていないのに。

「ヴィレン……ありがとう！」

ルクレツィアが涙目で嬉しそうに笑うと、ヴィレンは頷いて、そして今度こそ竜の身体になって夜空の向こうへと飛び立って行ったのだった。



ヴィレンが去り、ルクレツィアは寂しく思ったが、また会える日を楽しみにしていようという思いを心の中に大切にしまった。

気付けば夕食の時間を過ぎていた。使用人の誰も声を掛けてくれなかった事にルクレツィアは現実に戻された気分のため息をついた。そのまま寝ようかと思ったが、どうやらそれはルクレツィアのお腹の虫が許してくれないらしい。

ルクレツィアが部屋から出て食堂へ向かっていると、すれ違った使用人が慌てた顔をしていた。

(何なの?)

ルクレツィアは居心地の悪さを感じながらも、食事を済ませてざつさと自室に戻ろうと考える。今夜は秘密の友人ヴィレンとの、楽しいひと時の思い出に浸りながら眠りたいと思ったからだ。

ルクレツィアが食堂の扉に手を掛けた時、屋敷の執事長が慌てて走り寄って来た。

「お嬢様！」

普段はルクレツィアの存在を無視するくせに。なぜか話しかけてくる彼を訝しげに見上げる。

「今日はもう遅いですから、お食事はお部屋にお持ちします」

遅いと言っても、少し遅れた程度の時刻だ。

「もうここまで来たのだから、ここで食べるよ」

「いけません！」

扉を開こうと力を入れると、執事長に怒鳴られる。驚いたルクレツィアは執事長を見上げて、そしてキッと睨みつけた。

「ここは私の家よ！ どこで食事をとろうが、執事に指示される筋合いなんてない！」

そう叫び、ルクレツィアは怒りに任せて扉を開く。

すると、中では既に一人の人物が食事をとっているところだった。

青褪める執事長の隣で、ルクレツィアは目を丸くする。自分の目が信じられなくて、固まっていた。その人物はルクレツィアの父、ディートリヒ・ヴィル・クラウベルクだったのだ。

「……お父様……？」

ルクレツィアがやつとの思いで言葉を絞り出すと、父は無機質な目を向けてきて言った。

「ルクレツィアか……久しいな」

ちょうど食事を終えていた彼は優雅にナイフとフォークを置いて、席を立つ。そして今来たばかりのルクレツィアの前に立ち、青紫色の瞳で彼女をじっと見下ろした。

ルクレツィアは久しぶりの父親との再会に、何と声を掛けていいのか分からず戸惑っていると、ディートリヒの大きな手がゆっくり彼女の方へ伸びてきた。

「あの……お父様……」

ルクレツィアの弱々しい声に、ディートリヒの手は宙で止まる。そして、娘に触れる事なくその手は下ろされた。ディートリヒはそれ以上の言葉をかける事なく、ルクレツィアの横を通り過ぎて食堂から立ち去って行った。

約三年ぶりの再会だった。なのに、元気だったかの一言もなく父は行ってしまった。ルクレツィアはショックでその場に立ち尽くし、下を向く。また涙が出てきた。

(ヴィレン、やつぱりわがままなんて無理だよ……)

ポロポロと静かに涙を流すルクレツィアの隣で、執事長がうんざりした声で言った。

「旦那様の気分を害さないよう、部屋に戻れと言ったのに……これだから魔力マジカなしのお嬢様は……」
執事長はディートリヒが食堂を出て行ったのはルクレツィアのせいだと言わんばかりの冷たい声でそう言つて、ルクレツィアを不快そうな顔で見下ろした。

ルクレツィアは彼のそんな顔を見上げながら、止まらない涙を頬に伝わらせて下唇を噛み締める。
(私のせいなの……？ 姿を見せるだけで、私はお父様を不快にさせているの？)

あまりのショックに彼女の心が深い闇に沈んでいく中、ぼつりと光が差し込んだ。

『父親にわがままを言え。そしたらお前と友達になつて……お前をルーシーと呼んでやる！』

ヴィレンだった。まるで太陽の光のように、ヴィレンの温かな笑顔がルクレツィアの心の中を照

らしてくれる……

——ルクレツィアは小さな拳を握り締める。そして、執事長から顔を背けて走り出した。「待って……っ」

ルクレツィアは勇気を振り絞って、ディートリヒの後を追いかけた。いやだ、いやだ。こんな独りぼっちで寂しい場所はもう……これ以上いたくない！もしかしたらディートリヒに拒否されるかもしれない。それでも、何も聞かずにただ不安がって一人で耐えるのは、もう限界だと思った。

彼女の視界に、ディートリヒの後ろ姿が映る。

「お父様、待ってくださいっ！」

ルクレツィアがやっとの思いで追いついて叫ぶと、ディートリヒは目を丸くして振り返る。

ルクレツィアの姿を認めると「ルクレツィア……？」と、硬い表情になる。それが、ルクレツィアには不機嫌そうに見えて、涙を堪えると取り繕うようにぎこちない笑顔を作った。

「お父様……帝都にいらしてたんですね」

「ああ、先週に連絡を入れていたはずだが。今日は皇帝に呼ばれていたものでな」

ディートリヒの返事を聞き、執事から何も聞かされていない事にルクレツィアの胸が痛む。

父の冷たそうな青紫色の瞳を見つめながら、ルクレツィアはふと、これまで自分が魔力なしだと嘲り笑われてきた事を思い出していた。

（お父様、私……いつも独りぼっちなんですよ）

悔しくて堪らない思いを沢山してきた。

（皆がお父様は私を見捨てたと言っただけ……）

惨めな思いも沢山して、どんどん自分の事が嫌いになっていった。

（私は、お父様にとって本当にいらぬ子ですか……？）

涙が出るのを必死に堪えて、ルクレツィアは震える声で父に尋ねた。

「……お父様、私も一緒に領地へ帰っては駄目ですか？」

「……なに？」

ディートリヒの顔付きが変わる。これ以上わがままを言えば嫌われるかもしれない。でも、ルクレツィアはもう自分自身を止める事はできなかった。

「私はお父様と一緒に暮らしたいです！」

ディートリヒは少しの間、口を閉じ沈黙する。

そして、「ルクレツィア。お前は帝都で暮らすんだ」と、静かに言った。

ルクレツィアは絶望を感じ、ただ泣く事しかできなかった。ディートリヒはそんな彼女に背を向けて、再び歩き始める。

（……行ってしまっ！）

ルクレツィアはそう思うと、無意識に走り出しディートリヒの腰に抱き付いたのだった。

「ルクレツィア!？」

ディートリヒが驚いて大きな声をあげる。

「早く離れなさい！」

「私が魔力なしだからですか!？」

ルクレツィアが泣き叫ぶと、ディートリヒの手が止まる。

「お父様は私が魔力なしだからお嫌いなのですか？」

ルクレツィアは勢いに任せて言い募った。

「でも私、魔力がある事が分かったんです。魔力なしじゃなかったんです！ 練習すればきつと、魔法が使えるようになるはずですから！」

もう必死だった。父親の腰に抱き付いて泣き叫ぶ事しかできないけれど、ルクレツィアは自分の価値を父親に示そうと必死だった。

「だから私も連れて行ってください！」

「ルクレツィア……」

「私を見捨てないでえ!!」

ルクレツィアが叫ぶと、ディートリヒは膝をついてルクレツィアの小さな身体を強く抱き締めた。嫌いなんかじゃ……俺がお前を見捨ててるわけがないだろう！」

ディートリヒの嗅ぎ慣れない匂いがルクレツィアの鼻を掠める。ルクレツィアは呼吸をするのも忘れて目を丸くしていた。

はじめての父の抱擁はとても温かく、ルクレツィアは不思議な感覚だった。

ディートリヒは娘がなぜこのように泣いて縋ってくるのか理解できなかった。毎週届くこの屋敷

の執事長からの報告書を見ても、ルクレツィアは何の問題もなく過ごしているように思っていた。

ちゃんと栄養バランスを考えられた食事を取り、ルクレツィアに相応しい最高級のドレスを身に纏っている。久しぶりに見たルクレツィアは、報告書通りに健やかに育っているではないか。自分の娘ながら美しく成長していると感慨深いものを感じていた程なのに。

ディートリヒはルクレツィアの口から出た『魔力なし』という単語に引っ掛かりを覚えた。

「ニキル！」

ディートリヒはルクレツィアを抱きかかえてから、大声で叫ぶ。すると、先程の執事長が慌てた様子で、ディートリヒのもとへと飛んで駆けつけて来た。ルクレツィアを抱くディートリヒの姿を見て、執事長ニキルはぎよっとした顔をする。

「お前に聞きたい事が沢山ある。これまでの報告書を持って、今夜俺の執務室に来るように」

「は、はい……」

ニキルは焦った様子で頭を下げながら、チラリとルクレツィアを見た。

「分かったら行け」

「っ、はい！」

ニキルが立ち去る様子を見送ってから、ディートリヒはまだ涙を流しているルクレツィアを床に下ろし、指で涙を拭いながら言った。

「ルクレツィア、お前に聞きたい事がある」

ルクレツィアは顔を上げて父親を見た。

「お前の中の魔力が、ほとんど空っぽになっている。これはどういう事だ？」

この言葉から、デイトリヒはルクレツィアが魔力なしでない事を知っていたのだとルクレツィアは気付いた。

どうしようか、ヴィレンの事を言おうかとルクレツィアが迷っていると、デイトリヒが「あんな」と、娘の肩を掴む。

「俺は好き好んでお前を領地へ連れて行かなかったわけではないんだ。お前の体質が原因で、連れて行けないだけなんだよ……」

ルクレツィアは濡れた目を大きく開いてデイトリヒを見上げる。

「お前は魔力なしじゃない、魔力を持っている。が、しかし魔法は使えない体質なんだ」

デイトリヒはルクレツィアに言い聞かせるように説明した。魔法が使えないと、体の中に溜まった魔力を発散できないままになる。

コップに注がれた水が満杯になってそれ以上注げないように、人の体も保持できる魔力量は人それぞれで決まっている。溢れた分の魔力は、次第にその人の身体を蝕んでいく。高熱など体調不良を引き起こし、命に関わる危険性があるのだ。

「お前が赤子の時に俺が抱いたら、俺の大きすぎる魔力に当てられその症状に陥りかけたんだ。だからできるだけ俺から……離れて暮らせるよう、お前のために帝都に屋敷を買った」

ルクレツィアは信じられない気持ちだった。

自分は父親に、見捨てられてなどいなかったのだ！

「だから、教えてくれ。ルクレツィア」

デイトリヒの声に力がこもる。

「お前が魔力を発散させた方法を」



深夜、執務室にいたデイトリヒはウイスキーの入ったグラスを傾けながら窓の外に広がる夜空を見上げていた。

「……カレン……」

呟いたのは、とある女性の名前。

「俺はなんて情けない父親なんだ……」

思い出すだけで怒りが込み上がってくる。

デイトリヒが持つグラスがパリンと割れて、中のウイスキーがこぼれ出た。

ルクレツィアを寝かしつけた後、ニキルを呼びこれまでの報告書を元に詳しく尋ねてみると、とんでもない事実を知った。ルクレツィアは周りの貴族から『魔力なし』と差別され、そしてそれはこの屋敷でも行われていたのだ。

（どんなに美味しいものを食べて、綺麗なドレスを着て過ごしていたとしても……ルクレツィアは満たされない、辛い毎日を過ごしていたはずだ）

この張りぼてのような報告書を信じ、安心していた過去の自分にも腹が立つ。

（子供は敏感だ。大人のそういう雰囲気をすぐに察知するし、そしてその原因は自分だと考える）拳を握り締めると、割れたガラスの破片が食い込み、血が滲んだ。

「俺は何のためにルクレツィアを帝都に残したと……」

普段酒には酔わないデイトリヒだったが、この日ばかりは少し酔いが回ったようだった。

デイトリヒがルクレツィアを帝都に残すと決めた日から、娘の後ろ盾となってくれる家門を探していた。そこに手を挙げたのは皇族だった。

皇帝はルクレツィアと皇子の婚約を結ぶとまで言っていたので、娘を守ってくれるという約束をデイトリヒは信じていたのに。

ルクレツィアが苦しんでいる間、自分は皇帝と交わした約束のため、身を粉にして帝国の防衛前線地域を飛び回り、敵国や魔獣との戦いに明け暮れていたのだ。

「……」

デイトリヒの青紫色の目がサア……と冷たいものになる。彼らにはどう落とし前を付けて貰おうか、そんな事を考える。

「しかし、竜か」

皇帝との約束の件は一旦置いておいて、今はルクレツィアが話してくれた竜について考えよう。

デイトリヒも知らなかったが、どうやら竜は自分の意思で他者の魔力を吸収し、自分の魔力として取り込む事ができるらしい。他の種族にはできない芸当だ。

「竜がこの世の最強種と言われる所以かな……？」

他者の魔力を奪い、自分のものとする力。竜の力を借りる事ができれば、デイトリヒはこれからずっとルクレツィアの側にいる事ができるのだ。

「……あの子を母親と同じ目に遭わせるわけにはいかない」

デイトリヒは悲痛な顔で呟いたのだった。



朝ルクレツィアが目覚ますと、部屋の中に数名の使用人達がいたから驚いた。

何をしに来たんだと思ったが、どうやらルクレツィアの身支度の手伝いをしてもらえるらしい。急に変わった待遇に戸惑いながら、ルクレツィアはとりあえず朝食をとり食堂へと向かった。

「おはよう、ルクレツィア」

食堂ではすでにデイトリヒが待っていたようで、ルクレツィアはドキドキしながら父に挨拶を返すと、遠慮して少し離れた席に座る。

「近くで食べてくれないのか？」

デイトリヒが悲しそうに笑った。ルクレツィアは高鳴ったままの胸で席を立ち、そしてデイトリヒのすぐ近くの席へと座り直す。

使用人達が朝食を運び込んできた。デイトリヒと同じ食卓を囲むなんてはじめてで、ルクレツィ

アはあまりの嬉しさに涙が出そうになる。

「ルクレツィア。お前の体質について話しておこうと思う」

食事の途中でデイトリヒが言った。

ルクレツィアが頷くと、彼は影のある表情を見せてから改めて口を開いた。

「そうなる……まず、お前の母親の死について話さねばならない」

ドキリとした。ルクレツィアは母親の事を全く覚えていなかったから。彼女が物心つくより前の幼い頃に亡くなったと聞いている。

「お前の母カレンは……お前と同じ、魔法が使えない女性^{むじょ}だった」

デイトリヒは少し迷っているような、考える素振りを見せた後、言葉を選ぶように間を空けてゆつくりと話した。

「彼女は特殊な体質だった。魔法は使えないが、魔力が体に溜まり続けていくという——」

そうして、デイトリヒは語った。今のルクレツィアと同じく、彼女の母親はその溜まった魔力を発散させる事ができなかった事。デイトリヒが必死になって解決策を探している間にも魔力は溜まり続けカレンの身体を蝕み、そしてやがて彼女を死に至らしめた事を。

「その体質を受け継ぎ、お前が生まれた」

デイトリヒは張り裂けそうな胸の痛みに耐えながら続ける。

「俺はお前を、母親と同じ目に遭わせたくなかったんだ……」

忘れもしない。デイトリヒがこの世で最も愛した彼女の死に際の言葉を。『デイトリ、貴方に出

会えて幸せだった』と、いう遺言を……

だからこそデイトリヒは、カレンが命をかけて産んでくれたルクレツィアを、今後何が起きようとも彼女の分まで愛し続けるだろう。自分の命に代えても守る覚悟がある。

「ルクレツィア、お前はカレンと同じ体質だが……」

デイトリヒは思案しながら言葉を続けた。

「俺の血も入っているから、いつか必ず魔法を使える日が来るはずなんだ」

父の言葉に、ルクレツィアは驚きで目を大きく開く。

それが何年先かは分からない。十年先かもしれないしそれ以上かもしれない。もしかしたら、自分を慰めるための、父の優しい嘘なのかもしれない。

けれど、魔力^{マジック}なしという劣等感を抱いていたルクレツィアは、自分もいつかは魔法^{マジック}が使えるようになるのだと父に言われて、嬉しくてたまらなかった。彼女は思わず、明るい笑みをこぼす。

ルクレツィアの魔力を外部に発散させる方法が見つかるまで、デイトリヒは娘に近づくつもりはなかった。顔を見てしまえばきつと、たまらなくなつて抱き締めてやりたくなくなるだろうから。

そんな事をすればルクレツィアはカレンと同じ結末を迎える……だったら、娘と自分の時間を犠牲にしてもルクレツィアを守るための選択をすると、デイトリヒは自分自身に誓っていたのだ。（結果的に俺のそういった態度がルクレツィアを傷付け、周りの者を勘違いさせてしまった……）

ずっと魔術の研究ばかりしていたデイトリヒは、人世に疎く鈍感なようだ。自分の新たな欠点を今更ながら自覚するデイトリヒだった。

ディートリヒはやっと見つけたのだ。長年模索してきた答えを。

「……竜だ、ルクレツィア」

しかし、それは永遠の解決方法ではない。今は昨日出会ったという竜のおかげでルクレツィアと触れ合えるが、また魔力が溜まってしまえばルクレツィアとディートリヒは一緒に居られないのだ。「昨日出会った竜を、どうにかして呼び戻せないだろうか？」

「分かりません……でも」

ルクレツィアは困った顔で目を伏せていたが、すぐに顔をあげる。一人じゃないのだ、今はディートリヒが側にいてくれる。

「お父様と一緒になら、きっと大丈夫な気がするんです」

「ルクレツィア……」

ディートリヒは目頭が熱くなるのを感じながら、ルクレツィアの小さな肩を抱き締めたのだった。



ルクレツィアとの間にあった誤解は解けた。あとは魔力の問題を解決できれば、これからは娘と心置きなく過ごすことができるようになる。

ディートリヒは例の竜を探すために、ルクレツィアを連れて首都の中心部へ出掛けてみようかと考え、ついでに娘が好きそうな店にもいくつか連れて行ってやりたいと思った。

しかし、残念なことに彼には片付けるべき書類仕事が溜まっていた。ディートリヒは気を落としながらも仕事に取り掛かる。仕事がひと段落し、時刻を確認すると、ちょうど晚餐の時間となっていた。

(ルクレツィアは今日、何をして過ごしていただろうか)

すぐに愛おしい娘の様子が気になり、ディートリヒは執事長を呼んでルクレツィアの一日の様子を報告させた。

「……えっと……」

執事長は青ざめた顔で言葉を詰まらせていた。わざわざ呼び出されて、魔力なしの今日一日の様子を聞かれるなんて、彼は夢にも思っていなかったのだろう。

ディートリヒの青紫色の瞳はすぐに冷気を帯び、目の前の執事長を冷たく見据えた。

「……もういい。食事の時に娘に直接尋ねるとしよう」

執事長の、娘への無関心さへの怒り、呆れ、そして失望を隠すことなく、ディートリヒは息を吐き立ち上がると、ルクレツィアが待っているであろう食堂へと向かった。

しかし……

「どういう事だ？ どうして娘の姿がない？」

そこにルクレツィアの姿はなかった。ディートリヒが使用人達に尋ねるが、誰も理由を答えない……いや、答えられなかった。使用人の誰一人として、ルクレツィアが今屋敷のどこに居るのか把握していないから。

「はあ。もういい……もしかすると、部屋で寝ているのかもしれない。誰か、ルクレツィアに声を掛けてきてくれ」

まさか、夕食時だというのに誰もルクレツィアに声を掛けもしないなんて。先ほどの執事長といい、この屋敷の使用人達といい、ディートリヒは彼らの娘への態度に我慢の限界が近付いてきていた。

「――旦那様！」

そんなディートリヒのもとに、青褪めたメイドが駆け寄ってきた。ルクレツィアを呼びに行っていたメイドだ。彼女は顔面蒼白のまま叫ぶように言った。

「お嬢様が……お嬢様の姿が、どこにもありません！」

その瞬間、吹雪いた。比喩ではない。その場にいた使用人達は文字通り体を震わせた。室内だというのに極寒の冬の山のような零度を下回る寒さからか……それとも、目の前の偉大なる主人の怒りを買ったからか。

「……なぜ誰も、ルクレツィアがどこにいるのか知らないんだ？」

食堂の天井にはあつという間に氷柱ができ、シャンデリアや床の絨毯は凍っていく。

「そうやって……今まで、お前達はルクレツィアに無関心だったというわけか」

ディートリヒは絶対零度のように冷たい目で彼らを見つめながら、自嘲気味な笑みを浮かべた。

(ルクレツィア……)

娘が長年『無関心』という虐待を受けていたのだと改めて実感したディートリヒは、ますます自分が許せなくなつた。

「だ……旦那様……！ 魔法を……止めて、くだ……さい……！」

凍った空気を吸い込み、まともに呼吸ができず苦しそうな様子を見せる使用人達が、命乞いを始める。それを無言のまま見つめるディートリヒだったが、結局は魔法を止めた。

本当は怒りに任せて氷漬けにしてやりたいくらいだが、ルクレツィアの行方を追う方が優先だ。

この者達からは、まだ聞き出すべき事が残っている。

助かった……と、寒さで青く変色した唇を震わせている使用人達に、ディートリヒは冷酷な表情で淡々と言った。

「ルクレツィアがどこへ行ったのか、知る使用人を俺の前に連れてこい。一人くらい、いるだろう……いるよな？ 娘の身になにかあれば、お前たち全員の命で償ってもらおう」

主人の言葉を聞いた使用人達は、一斉に食堂から飛び出した。先ほど凍えて死にかけてた者達も全員だ。そして、ルクレツィアを帝都の中心部へ送ったという御者の男が、彼の前に連れてこられた。偉大なる魔術師に恐ろしい表情を向けられ、萎縮する御者からルクレツィアの行き先を聞き出し、ディートリヒはすぐさま屋敷を飛び出した。ルクレツィアが屋敷を出てから、数時間が経っていた。

ディートリヒが門から飛び出すと、目の前の暗がりの向こうで佇む二人の子供の人影を見つけた。

「……ルクレツィア!?」

ディートリヒは思わず叫ぶと、一目散にその影のもとへと駆けていく。

「……お父様？」

ぼつりとそんな小さな声が聞こえた。ディートリヒは確信する。

「ルクレツィア！」

ディートリヒは涙目になりながら、その人影……ルクレツィアを力いっぱい抱きしめた。

「なぜ一人で屋敷を出たんだ!？」

あまりの心配から声を荒らげてしまうディートリヒに、褒めてもらえるとはばかり思っていたルクレツィアはまさか怒られるとは思わず、少し涙目になっていた。

「お……お父様が、ヴィレンを捜してるって……それで……」

ルクレツィアは涙に震える声で、外出した理由を話した。

「お忙しいお父様の代わりに私一人でヴィレンを捜せたら……お父様の役に立てたら、お父様が喜んでほしいなって思ってもらえると嬉しいんですけど……」

そしてルクレツィアは泣いてしまった。ディートリヒはまだ言いたい事があったが、ひとまず涙を流すルクレツィアを大事そうに抱きしめた。

「そんな事をしなくても、俺はルクレツィアが世界で一番大事だし愛している……お願いだから、こんな危ない事はもう二度としないでくれ」

帝都には巡回する兵士がいるとはいえ、小さな子供が一人で出歩くには物騒だ。ルクレツィアが今、こうしてここにいるのも奇跡だとディートリヒは思った。

「ごめんなさい……」

ディートリヒがなぜ怒ったのか、父の愛に触れ理由を知ったルクレツィアは、泣きながらも素直

に謝る。ディートリヒは腕の中からルクレツィアを離すと、彼女の涙を指で優しく拭き取った。

そして、先ほどから観察するようにこちらを見つめる少年へと目を向ける。

「……お前がルクレツィアの言っていた竜か?」

「そうだけ?」

生意気そうな表情で、誰もが恐縮し気を遣うディートリヒに対して堂々とした態度で彼は答えた。

(男だったのか……)

ディートリヒは苦い表情を浮かべ、竜の少年を改めて見た。黒髪の、顔立ちの整った……ルクレツィアと同じ色の瞳を持つ、人と姿が何ら変わらない少年だ。違うのは、獣に似た縦長の瞳孔だけ。

「ルクレツィアの親父さんよお、俺を捜してたって? 何か用かよ?」

「……まずは口の利き方からだな」

ディートリヒは威圧的な口調でそう言うから、ルクレツィアを後ろに隠すように立ち、竜の少年を見下ろした。

(こいつが本当に下心なく、ルクレツィアに近づいたか分からないんだ)

いくら子供とはいえ、相手は最強種の竜だ。ディートリヒが警戒するのも無理はない。

「俺とやる気かよ、オッサン」

ヴィレンは負ける気など微塵も感じず、自信満々な表情で不敵に笑った。……戦闘態勢を取ろうとしたところで、先手必勝とディートリヒの放った緊縛魔法で縛られてしまうまでは。

「は……!? え!?」

ヴィレンは体の自由を奪われ、地面に倒れ込む。驚きの声をあげながら、まるで芋虫のように体をよじつてなんとか魔法を解こうとするが、ディートリヒの魔法はびくともしない。

ヴィレンはなす術なく敵に捕らえられてしまう。こんな事、彼にとつて、はじめての出来事だった。(なんだ!? 俺は竜族だぞ! それなのに魔法で押し負けるなんて……!?)

「素直に従うようになるまで、俺が躑けてやる」

ディートリヒの鋭い青紫の瞳が輝く。ヴィレンはそれが、おとぎ話に出てくる魔王の瞳のようだと思った。更には、その男が持つ膨大な魔力量に震え上がる。

「お父様! ヴィレンに乱暴しないで!」

ヴィレンが死を覚悟していたところで、ルクレツィアがディートリヒを慌てた様子で止める。

愛娘に弱い恐怖の男、ディートリヒは、娘の言葉に躊躇ためらいつつも緊縛魔法を解いてやった。

体が自由になった途端、ヴィレンは人型から竜の姿になり、逃げこむようにルクレツィアの腕の中へと飛び込んだ。

「ヴィレン、大丈夫?」

「お前の父親、恐ろしすぎるだろ……」

ゲホ、と咳き込みながらヴィレンが言った。ルクレツィアは申し訳ない気持ちになり、ヴィレンの小さな体をぎゅっと抱きしめる。

するとヴィレンは少し苦しうにしながらも、上体を起こしてルクレツィアの顔を覗き込みながらニヤリと笑い、彼女に言った。

「よくあのオッサンと喧嘩できたな、ルクレツィア……いや、ルーシー」

『ルーシー』、それはヴィレンに友達として認められた親愛の証。ルクレツィアは一瞬、驚いたように目を大きくした後、すぐに嬉しそうにニコリと笑う。そんな彼女の腕からヴィレンはピョンと飛び出して、そして再び人の姿となった。

「喧嘩はしてないけど……でも、ヴィレンのおかげでお父様と向き合えたよ」

と、ルクレツィアはヴィレンに笑いかけながら言った。

そんな仲のよさそうな二人の様子を見て、ディートリヒは、ヴィレンはそこまで危険な奴ではないのだろうと判断し、安堵の息を小さく吐いていた。

「ルクレツィア。もう遅いから、屋敷の中へ入ろう」

見ればルクレツィアの衣服や靴が汚れている。ルクレツィアの表情からも、疲れが見て取れた。

「ルーシーのやつ、今日ずっと俺のことを捜してたんだって!」

ヴィレンが愉快そうに言った。そして、どこか嬉しそうだ。

「待ってれば、俺の方から会いに行つてやったのにさ……」

照れた様子でそう言うことから、すぐに彼は何か思い出したようで可笑しそうに吹き出す。

「そういえば……俺がルーシーを見つけたとき、こいつ何してたと思う?」

ヴィレンの急な問いに、ディートリヒが答える代わりに肩を竦めてみせると、彼は大笑いしながら答えを言った。

「ルーシーのやつ、迷子になって泣いてたんだぜ!」

「い、言わないでよ、ヴィレン！」

恥ずかしそうに顔を顰めるルクレツィアを、ディートリヒは優しく抱き上げた。

「俺を喜ばせようと頑張ってくれたんだよな、ありがとう」
すると、ルクレツィアは心底嬉しそうに笑って頷いた。

「中に入るう……ヴィレン、お前も。娘を助けてくれて、ありがとう。一緒に夕食でもどうだ」
ディートリヒが振り返り、ヴィレンにその声をかける。すると、彼はにっこり笑って「俺、めちゃくちゃ食うからな！」と、元気よく返事をし、彼らとともに屋敷の中へと入っていった。

「ルクレツィア、この屋敷を引き払って領地へ帰ろうか」

食堂に向かう途中、ディートリヒが言った。

「これからはずっと俺と一緒に過ごそう」

ディートリヒは思ったのだ。この屋敷はきつと、これまでルクレツィアを傷つける事しかしてこなかった。だからいけない、屋敷も、使用人も、全部。

当初、ディートリヒはルクレツィアをそのまま帝都に住ませようかと考えていた。毎日一緒というわけにはいかないが、頻繁に帝都へ来れば、ルクレツィアもそこまで寂しくないはずだ。領地に連れて帰るよりも、ずっと住み慣れた帝都の方がルクレツィアにとっていいのではないか……そう、思っていた。

（でも、もうそんな事は考えない。娘は俺と領地で一緒に暮らす）

そう決めたならば、領地に帰るための準備が必要だ。明日すぐに、というわけにもいかない。

ルクレツィアは嬉しくなり、明るい表情で大きく頷いた。

「帝都にいる間は毎日俺と一緒にしよう。これまでできなかった分、沢山遊ぼう」

ディートリヒが大きな手を差し出しながら言った。ルクレツィアにとって父の話は、まるで夢のようにだ。彼女は頭の中でディートリヒと過ごす楽しい時間を想像しながら、父の手を掴む。

「本当ですか？ 嬉しいですよ！」

ルクレツィアが顔を綻ばせる。ディートリヒも優しく笑い返し、ルクレツィアから視線を外して前を向く。すると、途端に彼の瞳に冷たい光が走った。

「だが、領地へ帰る前に必ずやらねばならない仕事があるな……明日は俺と皇宮へ行こうか」

皇宮。あまりいい思い出のないルクレツィアは返事をするのに躊躇った。しかし、会話を聞いていたヴィレンが「皇宮かあ、行ってみたい！」と明るい声で言ったので、彼女はコクリと頷く。

（ヴィレンも一緒なら、大丈夫な気がする。もう一人じゃないもんね）

ルクレツィアはヴィレンの隣に立つと、彼の手を取り言った。

「また一緒に寝ようね。朝までお喋りでもする？」

これからルクレツィアは父ディートリヒ、そしてはじめてできた友人ヴィレンと一緒に過ごせる事になったのだ。こんな幸せな事ってない。

楽しみにしている様子のルクレツィア。ディートリヒから穏やかではない空気が流れてきた。

『また』

後方でボソリと呟くディートリヒの声を聞いて、ヴィレンは後ろを振り返れない。

『また』とはどういう事だ？ 竜人のヴィレン？」

(ルーシーの親父、怖えー！)

背中にひしひしと感じる威圧感は、竜一人を呪い殺せてしまいそうなほどの殺気だ。

「実は昨日、ヴィレンとベッドで……」

「ストップ！ ルーシー、ちょい待て！」

この世で自分が怖いものは自身の母親くらいだと思っていたヴィレンは、他にも怖いものはあったのだと痛感する。

こうして、すれ違っていた父と娘は、一人の竜のおかげで手を取り合う事ができたのだった。



「ふうん。俺がいれば二人は一緒にいられるんだ」

夕食後、ディートリヒに事情を聞いたヴィレンは勿体ぶった口調で言った。ルクレツィアは今日出歩いた疲れから、夕食をとるとその後すぐに眠ってしまった。今は室内に二人だった。

「十分な褒美を用意するつもりだ。竜は財宝を好むと聞く、お前の満足いく額を用意しよう」

もちろん宝石でだ、とディートリヒが言うと、ヴィレンは考える間もなく「いいぞ」と答えた。あっさり了承するヴィレンに、ディートリヒは少し心配になった。

「いいのか？ ルクレツィアが魔法を使えるようになるまで、ずっと側にいなきゃいけない。いつ

終わるか、分からないんだぞ」

「期限は構わないぜ。俺と人間の寿命は違うからな……きつとルーシーにとつての一生も俺にとつては、そう長くない年月だし」

五十年くらいなら国に帰らなくても家族は何も言わないだろう、と続くヴィレンの話を聞きながら、ディートリヒは、竜は人間の何倍もの年月を生きるという話を思い出した。

「ところで、ルーシーは本当に魔法が使えるようになるのか？ その、魔力^{マジカ}なし？ って、やつなんだろう？」

『魔力^{マジカ}なし』の言葉の意味を、ヴィレンはまだあまり理解できていない。ディートリヒは「使えるようになる」と、即答した。その表情は真剣で、その瞳は確信めいている。

「なんで分かんの？」

ディートリヒのあまりにも自信のある回答に、ヴィレンは更に質問する。

「それは……」

ディートリヒにしては、珍しく口ごもっていた。彼らしくない。それはディートリヒが、ヴィレンに、そして当人のルクレツィアにさえ、隠し伝えていない事があるからだだった。

「まあ、いいや」

もとより、そこまでの興味がないのか、ディートリヒの返答を聞く前にヴィレンは話を変えた。

「……あのさ」と、少し緊張しながらディートリヒに声を掛ける。

「もし、褒美は別のものがいって言ったら……変えてくれる？」

「望むものはなんだ？」

話題が変わった事で、少し安堵した表情を見せるデイトリヒは頷きながら尋ねた。
ヴィレンはすぐには答えずに、今日の事を思い出していた。

——人間の国が物珍しく、観光がてら色々な場所を回っていたヴィレンは、よく知る魔力の女の子を見つけた。空はもうオレンジ色に染まり、昼間にあんなにいた通行人達は半分くらいに減っていた。皆、家に帰る時間だからだ。

ヴィレンがその女の子に近付くと、彼女は泣いていた。

「なんで泣いてんの？」

ヴィレンがその声を掛けると、その子が怯えた顔をあげる。その瞬間、女の子は涙に濡れた目を真ん丸に開いて、驚いた表情を浮かべていた。

「なんだ、お前。俺に会いたくて、追いかけて来たのか？」

抑^{かつか}揃^かってやろうとニヤニヤと笑いながらヴィレンが続けて言うと、ルクレツィアの顔がみるみるうちに喜色に染まっていく。そして、とても嬉しそうに笑ったのだった。

「うん……！ ヴィレン、会いたかった！」

その時のルクレツィアの笑顔が、ヴィレンの頭から離れないのだ。

まるで、心から自分を求めているような。まるで……自分のためだけに向けられたような笑顔。
(あの時のルーシーの笑顔、どんな宝石よりもキラキラしていて可愛かったな……)

確かにあの一瞬、時が止まったかのように、ヴィレンは彼女の笑顔から目が離せなかった。

話を聞けば、ルクレツィアは本当にヴィレンを捜しにきていた。そして道に迷った挙句、お金を落としてしまい家に帰れなくなったと聞いて、この屋敷まで連れて帰ってあげたのだった。

「——ヴィレン？」

デイトトリヒに名前を呼ばれて、ヴィレンはハッとする。

途端に、彼の顔が真っ赤に染まったので、デイトトリヒは眉をひそめた。

(か……可愛いか、俺、馬鹿じゃねーの!?)

自分がかまさか、友達の女の子にこんな事を思うなんて……戸惑ったヴィレンは、慌てて言った。

「ま、まだ分かんねえから、決まったらその時に言うよ！」

なんだか様子がおかしいと、デイトトリヒは疑いの眼差しをヴィレンに向けるが、彼は必死に目をそらした。

「まあ……取り敢えずは、これで契約成立ってことで！」

話を早く切り上げたい様子のヴィレンがそう言ったので、デイトトリヒは追及するのは止めておいてやろうと、頭を切り替えて頷く。

「ああ。よろしく、ヴィレン」

こうして、デイトトリヒとヴィレンは晴れて契約を結んだのだった。